

熊本農業のビジョン

……その現況と方向……

大田 遼 一郎

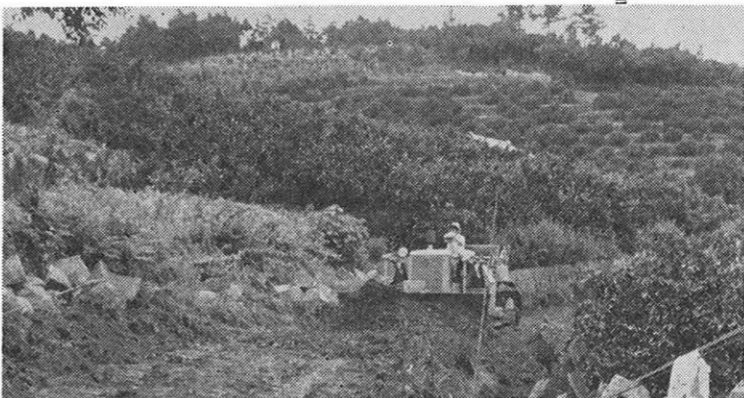
わが国の農業はいま大へんな激動期の中にいる。曲り角が叫ばれてからもう何年かたつが、農村は現在どんな地点に立っており、これからさきどうなるのか。斜陽といわれて悲観ムードがひろがり、青少年たちはきそって村を出るが、このいきおいはどこまでつづくのか。農業はまた災害がつきもので、昨年は長雨によるムギの大不作であったが、今年は予想もしなかった暖冬異変で、全国的にもハクサイやカンランの大暴落、こんな時何とか救済の方法はないものか。こういう不安定な状態をくり返さないためには、どうしたらよいか。指導者も農家もアタマのいたいことばかりであるが、農業も必ずしも暗い面ばかりではない。やりようによってはりっぱな成果も上っ

ている。現にミカン地帯やイグサ地帯では、サラリーマンはおろかちよつとした中小企業でもかなわないうような高い収益をあげている農家——企業の経営があらわれだしている。構造改善事業にとりくんで、新しい開拓者精神にもえるグループも、あちこちにうまれだしている。といった明るい側面もいくつか数えられる。しかし全体としてみると、まだまだおくれた面、改善されなければならない状態が少なくない。といっても何を、ど

数字が語るもの

農林省の統計調査部で出している「地区別県別農業生産指数」というものがあ

る。耕種農業から養蚕、畜産にいたるまで、農業全体の生産が毎年どのように動



△急ピッチのミカン産地造成

いているかということを知る一つのメヤスであるが、それをみると、昭和二十五年（二十七年の平均を一〇〇として、三十二年には全国で一三四つまり三割四分の生産の上昇がおこなわれた。しかし地域や県によって大きな差がある。九州では福岡一一六、佐賀一一九、熊本一一〇というように、農業がいちばん進んでいるといわれている諸県の数字が低く、もっともおおわれているとみられる鹿児島が一六二というように非常に高い伸び率である。宮崎も比較的の高い数字であるが、畑作地帯南九州の最近の生産の躍進は、昔に比べてイモの増収が二倍以上であること、工芸作物や畜産が大幅に伸びたためである。

これに対して熊本をふくむ先進三県の生産指数の停滞は、いちばん大きな比重を占める水稲作が、土地改良のおくれや地力低下でアタマウチであることをあらわしている。もっとも先進三県、とくに熊本県ですべての部門が停滞しているわけではない。むしろ九州の中ではかなり高い伸び方を示している部門がいくつもある。果物の一七二、工芸作物一六五、畜産二九七などがそれである。なかでも桑・養蚕の一四二は、九州はおろか西日本すべしである。いわゆる成長部門は熊本でもたしかに伸びている。しかしまだ全体としての生産指数を高めるだけの力にはなっていないというのが実状である。



△イグサの増殖も著しい

いまひとつ農家の収支をあらわすものとして、やはり農林省の「農家経済調査」をみると、熊本の場合は非常に特徴的である。というのは福岡や大分、長崎などが農業所得（農業収入から経費を引いたもの）よりも賃金、給与などの兼業収入を主とする農外所得に依存するのに対して、本県は九州でも典型的な農業所得依存型である。すなわち三十七年度の一戸当り農業所得二十七万三千円、農外所得十二万六千円したがって農家所得三十九万九千円というぐあいである。ところで福岡県は農業所得二十六万、農外所得三十二万で計五十八万円、佐賀県は農業三

十六万円、農外十九万計五十五万円というように本県をかなり引きはなしている。熊本県の九州における農家所得の順位は、第三位の大分県四十四万円について第四位という状況である。生産指数では最高の伸び率を示している鹿児島は、所得からみると農業・農外合せて三十万円という最低の水準であるが、残る宮崎、長崎ともに三十七万円見当であるから、だいたい熊本に接近して来ている。そして本県の場合、農業所得は第一位の佐賀についで高いのであるが、農外所得の水準

米と三つの成長部門

本県は八代平野や熊本平野、玉名平野をようして、もともと品質のよい肥後米の大産地である。水稲作は依然として県農業の最大の基盤であることは変りない。しかしそれが戦後はどうにも不振である。熊本ばかりでなく、佐賀平野や筑後平野も同様であるが、これにはいろいろの原因があるようだ。まず耕地の区画整理がすすんでいないこと、用排水路が未分離なこと、地下水位が一般に高くなっている稲の後期の成育がよくないこと、耕地条件がわるいため裏作に飼料作も入らず、したがって家畜と結びつけた地力の増強が充分でないこと、労力不足に対応して

が鹿児島と比べて非常に低いことが以上のような数字となつてあらわれるわけである。これは要するに県内において農村や山村地帯の占める割合が高く、県全体としては近代的な産業と労働市場が発達していないためである。そこで新産業都市の建設などによって、産業構造の体質改善をはかり、農家にとつても有利な兼業先がくりだされなければならないとともに、本来の農業所得を一そう高めるための工夫が必要である。

機械はだいぶ入っているが、土地条件にさまたげられて経済的、能率的に使われていないことなどであるが、ひと口にいうと土地改良のおくれが根本であるといえよう。そこで八代平野の新造採掘の計画や玉名平野の白石堰の竣工など一般的な土地改良事業が進むこと、農業構造改善事業で土地基盤整備がおこなわれることが、何よりも大切なこととなる。もしこれらの事業が順調に成功すれば、熊本県の水田地帯の中心部はみごとな若返りを示すであろう。飽託の水田、八代の水田いずれも米麦を主体とするが、前者では一部にそ菜をとり入れた集約経営、後者ではイグサなりそ菜と結びつけた現在の営農の姿がもっと大きく発展するで